迎向阿伊努民族的春天

アイヌ民族の春をめざして
To Move Toward the Spring of Ainu

黃智慧　中央研究院民族學研究所
石丸雅邦、石村明子 翻譯

北海道的春天總是很晚才到，每年要到5月，深陷在覆雪裡的大地才開始有復甦的跡象。在這一片廣達78,000平方公里的土地上，山脈集中於東南部，稱為日高山脈，由38座海拔2千公尺以上的群山層巒相連而成。山間河流向南流入太平洋，形成緩和的河谷丘陵地：尤其是沙流川的兩岸，冬季甚少積雪，夏季漁產、林產豐富。大部分阿伊努族人即世居在此，他們稱呼北海道為aynu-mosir，意思是「人所居住的大地」。

阿伊努民族的人口有多少？這是一個難以回答的問題，因為近代明治國家大量移入開拓墾殖的和人（阿伊努族稱之為sisam，即自己的鄰人之意，也就是後來的日本人）的結果，使得今日的阿伊努民族與和人混血，其容貌特徵已不若過去明顯，也因為同化教育政策而

北海道の春はいつも遅めに訪れて来る。毎年5月になると、深く雪に覆われた大地にようやく蘇りの兆しが現れる。この面積7万8千平方キロメートルにも及ぶ土地の主要な山脈は東南部に集中している。海抜2千メートル以上ある38の重なり合った山々が日高山脈を形成している。山間には南へ向かって太平洋に流れ込む河川があり、一面のゆるやかな河谷丘陵地帯を形成している。特に沙流川の両岸は、冬の積雪が少なく、夏は海・川の幸、森の幸に恵まれており、アイヌ人の多くはこの地域に住んでいる。彼らは北海道のことをアイヌモシリと呼んでおり、その意味は「誇たる人間の住む大地」である。

アイヌ民族の人口はどのくらいであろうか？これは難問である。近代明治国家は大量に和人（アイヌ民族はシサムと呼んでおり、自分たちの隣人を意味する）を移入させた結果、今日のアイヌ民族は和人との混血が進み、形質的特長が目立たなくなってきている。それだけではなく、教育政策のため言語が継承しにくくなり、更に社会的差別を受け、長い期間にわたって彼らの多くは

失去語言傳承，更因為來自社會的歧視，使得過去他們大多不願意承認自己是阿伊努人，所以正確人數很難估計。

回顧整部阿伊努民族的歷史，可以說是一部充滿哀愁與傷痛的被征服史。從13世紀鎌倉時代以來，和人渡過津輕海峽，在北海道南部半島上從事交易活動。由於漁林山產資源豐富，移民增加，與當地人之間的武裝衝突事件也不斷發生。到了15世紀中葉之後，和人主導了對阿伊努人的支配體制。17世紀江戶幕府將蝦夷地納入領地，賜和人後代為松前藩，統治體制益形穩固。但是阿伊努人仍舊繼續抗爭，從15世紀中葉到18世紀末年為止，松前藩史料曾記錄了27次的抵抗事件發生。

松前藩禁止阿伊努人與和人互相混居，把蝦夷地與和人地劃分開來，又將蝦夷地分配賜給其數十個家臣，使其擁有該地區課稅及貿易的獨占權。在松前藩苛酷的勞役驅使及傳染病流行等原因下，最初的阿伊努人口戶籍普查於1822年進行時，尚有23,000人；然而經30年後第二次普查時僅剩17,000人，人口銳減了4分之一，反映出阿伊努族當時消失之速度。

緊接松前藩之後，新成立的近代國家明治政府對阿伊努人所採取的卻是急

自らがアイヌ民族であることを認めたがらなかった。そのため正確な人数の推計は難しい。

振りかえってみると、アイヌ民族の歴史は哀愁と苦痛に満ちた被征服史であるといえよう。鎌倉時代から、和人はすでに津軽海峡を越えて、北海道南部の半島で交易に従事していた。漁業や林業の資源が豊富なため、移民が増加し、地元の人々との摩擦もよく起こった。15世紀半ば以降、和人がアイヌ人に対する支配体制を固めるようになった。17世紀に江戸幕府は蝦夷地を領土に組み入れ、松前藩を据えて、統治体制は次第に安定した。しかし、アイヌ人による抗争は依然として続き、15世紀半ばから18世紀末までの松前藩の史料には抵抗事件が27回にも及んだと記録されている。

松前藩はアイヌ人が和人と雑居することを禁じ、蝦夷地と和人地とを区別し、その蝦夷地を数十人の家臣に割り当て、当地区の課税および貿易の独占権を与えた。松前藩による過酷な労役への駆り立てや伝染病の流行が原因で、1822年に行われた最初のアイヌ人口全面調査では2万3千人もいた人口が、30年後に第2次調査の時には1万7千人と、4分の3に激減し、当時のアイヌ人が消えゆく速度を反映している。

松前藩に続いて新たに成立した明治政府は、アイヌ人に対して急速な同化政策を施した。1869年（明治2年）、

切的完全同化政策。1869年（明治2年），明治政府降伏了最後一個舊藩屬反抗者的武裝部隊後，設置「北海道開拓使」。以「開拓」為目的，積極移入本州的大資本企業與大量勞工，企圖利用北海道豐富的林礦、漁業資源，提供新興明治國家向外擴張時所亟需的財富與能源。急速開發的結果，造成阿伊努人傳統的生活環境徹底的破壞。

在文化政策上，明治政府獎勵學習日本語、日本文字，禁止男子戴耳環、女子臉部刺青之習俗，並編給戶籍，強制改姓名。經濟上，設定漁業權，使得阿伊努人無法自由捕鮭魚、鱒魚，獲取貝類及海草；並禁止阿伊努傳統的狩獵用的弓法道具，各家一律發給少許的農具及種子，鼓勵勸農。開拓政府官員們認為如此便可以將以漁獵採集為生業方式的阿伊努人，改造為同內地來的農民一樣從事農業生產以利國富。

可是沒有想到這些政策的施行，反而使得阿伊努人更加流離失所。由於不擅農耕，被迫使用日本語；在社會評價上，阿伊努人益發成為愚蠢、不潔、不道德之代稱，也成為內地農民與觀光客嘲笑和歧視的對象。在生計上，毫無農耕技術與經驗的阿伊努人生活益加困窘；男子多遠渡庫頁島協助開荒或進入都市從事勞力工作，女子則淪落各地為娼或

明治政府は旧藩に属する最後の抵抗者の武装部隊を屈服させた後、「北海道開拓使」を設置した。「開拓」を目的にして、積極的に本州の大資本企業と大量の労働者を移入させ、北海道の豊富な林業、鉱業、漁業資源を利用し、新興の明治国家が外に拡張する際に必要とした富を提供することを企てた。こうした急速な開発の結果、アイヌ人の伝統的生活環境は更に徹底的に破壊された。

文化政策では、明治政府は日本語・日本の文字を学ぶことを奨励し、男子の耳飾、女子の顔に刺青をいれる慣習を禁じ、また戸籍を設け、日本名に変えることを強制した。経済的には、漁業権の設定により、アイヌ人が自由にサケ、マスを捕まえたり、貝や海草を採集することができなくなった。そしてアイヌ人の伝統的な猟をするための弓などの使用を禁じ、各家にわずかな農機具と種を交付し、農業を奨励した。開拓政府の官吏達はこのように漁・狩猟採集を生業とするアイヌ人を内地から来た農民と同じように改造し、農業生産に従事させ、富国化を図った。

しかし予想外にも、これらの政策の施行が、アイヌ人をいっそう路頭に迷わせることになった。農耕が下手で、なれない日本語を強制されたため、アイヌ人は愚かで不潔で、不道徳の代名詞とされ、内地の農民と観光客の嘲笑と差別の対象となった。生計上では、農耕の技術と経験が全くないアイヌ人の生活はますます困窮することとなった。男子ははるばるサハリン島まで渡って開墾に協力し、あるいは都市に流れて労働集約型の仕事に従事した。女子は各地で娼妓へと落ちぶれはて、あるいは

成為林場女工。可以說，自1880年到90年代間，是阿伊努族史上最為窮困潦倒的時期。在山村或城市街角挨餓、凍死的阿伊努人慘狀經常見諸報端，也映入來訪的內地文化人的眼中。終至引起內地輿論界的關切，展開對北海道開拓政府交相指責。最後，明治政府不得不在1899年制定「北海道舊土人保護法」，試圖保障阿伊努人的種種社會福利。

該法所謂「保護」的重點仍是勸農與近代教育。在這條法律下，對想要從事農耕的阿伊努人，政府提供一定額度的土地與農具、種子，並成立「舊土人學校」，提高就學率，此外，對於貧病無依者也給予社會救濟。這條法律的制定時期正好是日本剛領有台灣之後，雖然不直接相關，但是該法與後來在台灣施行的蕃地行政之間似有若干相似之處，反映出明治初期社會普遍的思潮背景。

「保護」政策所達成的效果，基本上有延續了阿伊努族的存活；但是阿伊努民族的命運在同化政策的思維底下，依然無法獲得喘息。他們開始說和語，著和服，梳和式髮型，穿和屐，成為效忠天皇的溫馴的農民。但是體質上的特徵及戶籍上的加註，使得他們在社會上就職不易，飽受歧視。在婚姻上，男子獨身者日增，女性則儘可能嫁給和人。

営林場の女性労働者になった。このように1880年から90年代間まではアイヌ史上で最も貧困な時期であったといえ、山村あるいは都市の道端で餓死または凍死するアイヌ人の悲惨な光景がしばしば新聞をにぎわすようになった。また訪れた内地人の文化人の目にもとまり、ついには内地の世論の関心を引き起こすこととなり、開拓政府に対してあいついで非難の声があがった。その挙句、日本政府は1899年に「北海道旧土人保護法」を制定し、アイヌ人の様々な社会福祉を保障しなければならなかった。

いわゆる「保護」の重点は依然として勧農と近代教育であった。この法律の下で、農耕を希望するアイヌ人に対して、政府は一定の土地や農機具，種を提供し、また「旧土人学校」を創立して就学率を高め、それ以外にも、貧困・病気で身寄りのない者に対して社会的救済を与えた。この法律の制定の時期は新領地台湾を獲得した直後である。直接的な関連性があるとは断言できないが、この法律はその後台湾で施行された蕃地行政と似たところがあり、当時の日本社会に流行っていた思想的背景を表している。

「保護」政策が達成した効果により、基本的にはアイヌ民族を存続させることができた。しかしアイヌ民族の運命は同化政策の下で、息をつくことさえできなかった。彼らは日本語を話し始め、和服を着、日本式の髪形をして、下駄を履き、天皇に忠誠を尽くす農民に馴化させられてしまった。しかし身体的特徴と戸籍上の註によって、彼らは就職するのに不利な上、ひどく差別を受けた。婚姻の上で男子の独身者は日増しに増加し、女性の多くは和人と婚姻を結ぶようになった。しかし

然而，女性所嫁和人多為內地本州前來北海道短暫打工者；一旦工作結束後，丈夫即消失無蹤，就算阿伊努妻子千里迢迢到本州尋夫，往往所得只是一則造假的地址。這樣的故事發生在每一個阿伊努的村落裡。於是，阿伊努人彼此之間寧可不婚，也不願與同族通婚。他們害怕同族間出生的純阿伊努子孫，又會再遭受社會的歧視待遇。這樣的婚姻狀況，顯示出一個民族命脈延續上的困境。著名的阿伊努族女詩人巴切拉八重子，即曾以短歌慨嘆如下：

1. 被憎惡的孩子
2. 應該比被寵愛的孩子
3. 更擁有活下去的意志
4. 為什麼我們同胞的孩子
5. 連活下去的意志都沒有啊？

（《若きウタリに》，1931年）

從家庭組織來看，阿伊努人的家族由一對夫婦及未婚子女所組成。有時喪偶的單親也會一起居住，原則上同一屋簷下只有一對夫婦。老人如果失去生活能力或對其家族、村落造成負擔時，習慣上會要求子女在深山裡築一小屋，靜靜地等待死亡的降臨，讓生命回歸林野

女性が嫁いだのは多くが本籍が本州で、北海道には短い臨時工として来た者であった。仕事がいったん終わってしまえば、夫はすぐ行方をくらましてしまい、たとえアイヌ妻が千里はるばる本州まで夫を探しに来たとしても、得られたのは教えられた住所が偽物であることが分かるに過ぎないことがしばしばあった。このような物語はすべてのアイヌの村の中で発生したことである。そして、アイヌ人の間には同族と結婚するくらいなら結婚しない方がましだという考えが広まった。純粋なアイヌの子どもが生まれて、再び差別待遇の犠牲となることを恐れたためである。このような婚姻の状況も、ひどい差別を受けた民族がその命脈を継続する上での苦境を反映している。著名なアイヌの女性歌人バチェラー八重子は歌で次のように嘆いている。

1. 愛でらるる
2. 子より憎まるる
3. 子は育つ
4. などてウタリの
5. 子は育たぬぞ

（『若きウタリに』より，1931年）

家庭組織については、アイヌ人の家族は1組の夫妻と未婚の子女から構成された。時には配偶者に死なれた片親もいっしょに居住することがあり、原則的に一つ屋根の下に1組の夫妻だけがいる。もし老人が生活能力を失い、その家族あるいは村に負担をもたらすような場合には、子女に山奥に小屋を築かせ、そこで静かに死の訪れることを待つ慣わしがある。命を森の大自然にゆだね

自然。

往昔在冬季，阿伊努人居於豎穴裡，夏季才住到地面上。近代以來則多以茅草築屋，屋中無隔間，中央有一火爐，是全家生活的中心。廁所、倉庫、動物檻舍皆設在屋外。聚落的規模不大，一般由五個家戶以上即組成一個部落（Kotan），沙流川平取町內最大的村落亦不過31戶。他們沒有土地私有的觀念，所有土地皆為部落所共有。數個部落再組成一個大獵場或漁場，獵場之間的邊境界線十分嚴格，如果不慎進入他村的獵場將受到懲罰。獵場間的紛爭，也往往是引發部落戰爭的因素。

男女性別的分際相當明確，男子屬於父系，擁有同形的祖印；女子屬於母系，擁有同一種結法的腹帶。財產的繼承或分娩、葬儀時，只有同一母系或父系的人才能在場。換言之，母傳女不傳媳，父傳子不傳婿。男子絕對不能與和自己的母親紮結同一種腹帶的女子結婚。男子在外出漁獵之暇，擅於木彫、編蓆等自製生活用具。女子擅於針繡（海鳥骨）；在皮衣上貼繡其他顏色的布料，呈幾何紋樣是阿伊努服裝的特色。

るのである。

かつて冬には、アイヌ人は竪穴に居住し、夏になってから地面の上に住んだ。近代以来多くはチガヤで家を築き、家の中には仕切りがなく、中央にある囲炉裏は全家族の生活の中心であった。便所、倉庫、動物の檻は全て家の外に設置されている。集落の規模は大きくなく、普通は5つ以上の家があれば１つのコタンとなる。沙流川平取町内の最大の村でも31戸を越えない。彼らは土地私有の概念を持たず、全ての土地は村の共有である。いくつかの村は更に大きな猟場あるいは漁場を構成し、猟場間の境界線は非常に厳格で、うっかりもし他の村の猟場に入れば懲罰を受ける。猟場間の紛争は、しばしば村の間の戦争を誘発する原因となった。

男女の領域はかなり明確で、男子は父方に属し、形の同じ祖印を共有する。女子は母系に属し、同じ結び方の腰紐を共有している。財産の継承、出産、葬儀の際には、同一の母系あるいは父系のメンバーのみ居合わせることができる。言いかえれば、母は娘にのみ相続させ、嫁には相続させず、父は息子にのみ相続させて婿に相続させないことになる。男子は自分の母と同じ結び目をくくった腰紐を持つ女子と結婚することを禁じられている。男子は外で漁・狩猟をしない休閑期に、木彫りや、蓆を編むなど生活用具を自製していた。女子は針（海鳥の骨）の刺繍に優れている。毛皮の服の上に他色の生地をアップリケしたり刺繍を施したりして幾何学紋様を形作るのはアイヌ服飾の特色である。

在宗教信仰方面，阿伊努人的宇宙共分三層——天界、地上界與地下界。天界諸神中最高神是日神與雷神；地上界的動、植、器物中普遍有靈；地下界則住著死者的靈魂。他們尊崇祖靈，在各項儀式舉行時，都會奉上食物，召請祖靈享用。此外，他們相信天界的神來訪人世時會裝扮成動物的模樣；所以山中最大的動物——熊，海上最大的動物——鯨，都是神來到人世時身披毛皮所化身而成。這些動物身上的肉脂皮毛，也就是神所帶來最珍貴的禮物。

每年阿伊努民族年中行事裡最盛大的儀式，即是舉行熊祭（Iomante）。在其觀念裡，人與神（天界）之間具有互酬性質。神帶來禮物（熊），人們對熊祭拜，獻上木幣，最後以歌舞送神回天界，並招請其再度來訪。這樣的宇宙觀與北亞及北美的原住民族之間有許多共通之處。

此外必須一提的是阿伊努民族雖沒有文字，卻有雄壯的敘事史詩——遊卡爾（Yukar），歌曲總數達一千六百多種。其內容為神謠或英雄事蹟，有即興也有古調。各村皆有遊卡爾的達人，以三拍的節奏，唱出詞典優美的古謠。有的詞典甚至可以源源唱上數個小時，被譽為與伊里亞得、奧德賽並列的世界三大敘

宗教信仰に関しては、アイヌ人の宇宙は天界、地上界と地下世界の3階層に分けられる。天界の神々のうち最高神は日の神と雷神である。地上界の動植物、器物の中にあまねく霊がある。地下世界は死者の魂が居住している。祖霊を崇め、儀式を行う際に祖霊祭（シンヌラッパ）も行う。彼らは天界の神が人の世に来訪する時、動物の姿を装うことを信じている。ゆえに山中最大の動物・熊、海の最大の動物・クジラは、すべて神が人の世に来た時、皮をはおって変身した姿と考えられている。これらの動物の肉・脂や毛皮は、神がもたらした最も貴重な贈り物である。

毎年アイヌ民族の年中行事のうち最も盛大な儀式とは、熊祭り（イオマンテ）である。その観念の中で、人と神(天界)の間で互酬性が成り立っている。神（熊）は贈り物を持ってきて、それに対して人々は熊を祭り、イナウ（御幣）を捧げ、最後に歌舞で神を天界へと送り返し、再度来訪するよう呼びかける。このような世界観は北アジアおよび北米の先住民族の間にしばしば共通する。

その外に注目すべきなのはアイヌ民族は文字を持たないけれども、雄大な叙事詩ユーカラがある。歌の総計は1千6百にも達する。その内容とは神謡あるいは英雄の物語で、即興のものもあれば古典もある。どの村にもユーカラの達人がいて、3拍のリズムで、優美な言葉で歌われる。数時間延々と歌うことができる話もあり、イリアス、オデュッセイアと並ぶ世界三大叙事詩の1つとまで称えられている。

事詩之一。

在體質人類學的研究上，阿伊努人的存在非常重要。早在十九世紀中期，人類學家首先提出阿伊努人乃高加索種的說法後，陸續有蒙古人種說、南方人種說、古代亞洲人種說等，引起學界很大的爭論。其中最有名的是小金井良精教授將日本石器時代出土的古代人骨和阿伊努人比較之後，提出其中的許多類似點，後來逐漸形成共識。即阿伊努人乃古代日本列島上的原住民族，因受從到西邊大陸渡來族群入侵的影響，一部分留下來與其混血形成今日之日本人，一部分則被追趕到東北，並且進入北海道成為今日的阿伊努人。

阿伊努人的體格要較現代人魁梧寬碩，最顯著的體質特徵在於頭長接近廿公分，不僅是近鄰諸族所沒有，也是世界少見。此外，雙眼皮、眼窩寬呈長方形、上下顎平板，全身體毛濃密。不過在今日，學者皆一致指出由於生活型態的變化及不斷混血的結果，純血統的阿伊努人幾已不可見。

而在外貌體質上與日本人的差異，其實是使得阿伊努民族的自尊受到傷害的主因之一。在優勢族群的社會裡，弱勢族群極易因其特殊性，不僅成為被觀光的對象，同時也成為被研究的對象。

一方、形質人類学の研究において、アイヌ人の存在は非常に重要である。19世紀中葉、イギリスの人類学者が始めてアイヌ人コーカソイド説を出した後、続々とモンゴロイド説、南方人種説、古代アジア人種説等が現れ、学界に大きな論争を引き起こした。その中でも最も有名なのが小金井良精教授が日本の石器時代に出土した古代人の骨とアイヌ人を比較した後、その中の多くに類似点があることを提示し、その後、次のような見方が徐々に形成された。すなわちアイヌ人が古代から日本列島に住む先住民族であり、その後、西の大陸から別な民族が移住してきたことに影響され、一部は混血して今日の日本人を形成し、ほかの一部は東北まで追われ、さらに北上して北海道に入って今日のアイヌ人になったというものである。

アイヌ人の体格は現代人と比較してたくましい様相を呈している。外見の特徴は頭長が長く、近隣の諸族に類を見ない。ほかに、2重まぶた、目のくぼみが長方形である、上下顎が平板、毛深いのも特徴といわれている。しかし今日、生活形態が変化し、絶えず混血した結果、純粋たるアイヌ人の特徴があまりみられなくなった、と学者は指摘している。

外観における日本人との体質上の相違は、実はアイヌ民族の自尊心が傷つけられた主な原因の1つである。マジョリティの社会にあって、マイノリティはその特殊性により、観光の対象となりやすいばかりではなく、研究の対象ともなりかねない。とくに戦前の学者は帝大の権威を以って、学術の名において地方政府に協力を要請

尤其是戰前學者挾持帝大的權威，以學術研究之名，要求地方政府協助，掘墳或採血，以及侵犯隱私之照相行為所引起的風波時有所聞。這使得阿伊努人對日本人學者的印象極為惡劣，漸漸採取不合作的態度或是要求金錢等報酬，以致於阿伊努族學術研究益加困難。

有鑑於此，1988年第25屆日本民族學年會在愛知縣中部大學召開時，決議設立「研究倫理委員會」來因應這些問題。翌年該會首先發表了對阿伊努研究的見解（參見『民族學研究』54卷1期）；明確指出：除了語言、生活習俗之外，人們的主觀意願亦是民族成立的要件，只要阿伊努人的自我認同意識存在，就應該視他們為一個民族。這是學界首次對日本政府表達之嚴正立場。該文並反省過去研究者對阿伊努民族回饋不足，呼籲學者應該體認自身的社會責任，今後在學校及社會教育上，應協助阿伊努文化的傳承，並增進日本社會與國際間對阿伊努文化的正確理解等。該聲明之後，學會還產生了一系列關於研究倫理的討論與共識。

し、墓掘や採血、およびプライバシーを侵害するような写真撮影などの行為から引き起こされた抗議などがしばしばあった。このことはアイヌ人の日本人学者に対する印象を極悪なものにし、アイヌの人々は非協力的な態度を取ったり、あるいは金銭による報酬を要求するようになり、アイヌ民族の学術研究はさらに困難を極めることになった。

このような事態に鑑み、1988年に愛知県の中部大学で開催された第25回日本民族学会にて研究倫理委員会を設立してこのような問題に対応することが決議された。この委員会が設立された翌年、アイヌ研究に対する見解を発表した（『民族学研究』54巻1号）。その中では次のように明確に指摘されている。「言語、習俗、慣習その他の文化的伝統に加えて、人々の主体的な帰属意識の存在が重要な用件であり、この意識が人々の間に存在するとき、この人びとは独立した民族とみなされる。アイヌの人びとの場合も、主体的な帰属意識がある限りにおいて、独自の民族として認識されなければならない。」。これは学界が始めて日本政府に対して厳正な立場を表現したものである。またこの見解では、過去の研究成果においてアイヌ民族に対しての還元が不足していることを反省し、今後は学校や社会教育において、アイヌ文化の伝承に協力し、日本社会と国際間でアイヌ文化に対する正しい理解などを進め、学者が自分自身の社会責任に対する自覚を持つよう呼びかけた。この声明の後、学界も引き続き研究倫理に関する議論と共通の認識を生み出していった。

90年代後，加入其他的社會奧援，阿伊努文化振興法終於獲得國會通過，在該法底下，阿伊努文化命脈逐漸恢復生機。可以說，阿伊努民族以其血淚交織的歷史，促成日本民族學界自我反省，並向前跨出了一大步。反觀我們台灣的人類學民族學界，是否也能殷以為鑑？

〔後記〕 1988年筆者就讀博士班第1年，有幸恭逢在中部大學舉行的民族學會盛會；對當年成立研究倫理委員會的提案人Steward Henry教授四處奔走的急切模樣，仍記憶猶新，深受感動。90年回國後，93年適逢聯合國制訂國際原住民年。當年9月在全球原住民領袖向聯合國大會演說期間，中國時報邀筆者撰寫整版6千字對阿伊努族的介紹。本稿為其縮小修訂版。

90年代以後、社会的声援も加わり、アイヌ文化振興法も国会で決議され、この法の下でアイヌの文化的命脈は回復の兆しを見せている。これまで、アイヌ民族は血と涙の滲んだ歴史を以って、日本民族学界が自己を反省し、大きく前進することを促した。一方、われわれ台湾の人類学民族学界はそこから学ぶことも大いにあるのではないか。

〔後記〕1988年、博士課程1年目に在学中の筆者は、幸いにも中部大学で行われた民族学会に立ち会った。当時、研究倫理委員会の提案者であるスチュワート・ヘンリー教授が走り回る姿はなお記憶に新しく、感銘を受けた。90年に帰国し、93年に国連による国際先住民年を契機に、台湾の新聞社・中国時報より、新聞の一面を占めるアイヌ民族の紹介を依頼された。本稿は当時発表したものを縮小・修正したものである。

【参考書目】

萱野茂 等 1997《アイヌ語が国会に響く》，東京：草風館。

新谷行1977《アイヌ民族抵抗史》，東京：三一書房。

チカップ美恵子1991《風のめぐみ――アイヌ民族の文化と人権》，東京：御茶の水書房。

山田孝子1994《アイヌの世界観》，東京：講談社。

財団法人アイヌ民族博物館監修 1993《アイヌ文化の基礎知識》，東京：草風館。

山路勝彦1993《台湾の植民地統治》，東京：日本図書センター。

白老愛努博物館園區內的村落守護長者。▶